

太陽の道・北緯34度32分の謎

遺跡と遺跡を繋ぐ古代都市・まほろばの原像を求めて

研究年度・期間：平成27年度

研究ディレクター：中川 滋弘
(映像学科教授)

共同研究者：原 一男
(映像学科教授)

学外共同研究者：小林佐智子
(映像学科客員教授)

“映像ならではの論文”あるいは“論文の映像表現”に挑もうと思う。

とり上げるテーマは「事実が現前しているのに不思議すぎて学説になりえない」古代史ミステリーである。

近畿地方の地図を開くと三輪山と二上山が東西に並んでいる。その間17km。この直線を東に辿ると伊勢斎宮から伊勢湾に至る。西に辿ると大阪湾を越えて淡路島に出る。そこにもまた「伊勢の森」と呼ばれる常陸寺山がある。三輪山から伊勢斎宮までは約70km。二上山から「伊勢の森」までも同じく70km。この間の同緯度線上に大神神社、箸墓古墳、明日香、藤原京跡、石舞台古墳、高松塚古墳、磯長谷の天皇陵、叡福寺と聖徳太子御廟、古市古墳群、百舌鳥古墳群、白鳥伝説の大鳥神社が整然と並んでいる。春分、秋分の彼岸には三輪山にのぼった太陽が二上山の鞍部に沈む。日本のレイライン、太陽の道と呼ばれる所以である。パワースポットが一行に轟めくパワーベルトと言ってもいい。

寺社や王宮、墳墓は人工建造物だから古代の都市計画に基づいて造ることは可能だが山は人間の手に負えない。イギリスの巨石群も同様だろうがレイラインと呼ばれる古代史ミステリーには伝承はあっても実証できないから学問の対象にはなじまず、従って学説もない。しかしながら今日でも見さえすれば一目瞭然なのである。証明できそうもないから手付かずのままだがシュリーマンのトロイア発掘のような宝が眠っているかもしれない。

映像による論文として仮説を立ててみた。

古事記、日本書紀、国造本紀に見える「倭国(やまとのくに)」の三輪山と「葛城国(かづらぎのくに)」の二上山は農作業の指標だったのではあるまいか？三輪山にのぼった太陽が二上山の鞍部に落ちる日を起点にして、それから何日目に田起こしをする、水を張る、粃を蒔く、田植えを始める、水を抜く、刈り入れをする。やがて収穫祭は祭りになり、神事になり、政(まつりごと)になり、権力闘争と統治に発展して古代王権が生まれていった。

偶然が重なれば必然になるが、ふたつの山が同じ緯度上にあることはさほどに珍しくはない。太陽の道という神秘的な太陽信仰を思い浮かべるが、北緯 34 度 32 分でなくても同じ緯度であれば太陽は東西に運行して見える。三輪王朝、葛城王国、あるいは学説は定着していないが河内王朝があったとして、三輪王朝に三輪山があり、葛城と河内の接点に二上山が鎮座していることが出来すぎているように思えるが、神事を行う山の周りに政治権力が生まれたと考えれば自然な成り行きである。最終的にこの地方を統一した大和朝廷がふたつの山を結ぶ線上に都や宮殿、寺社や墳墓を造ったとしても不思議ではない。

自然暦から発展した暦を伊勢斎宮を造って独占し、アジア外交と移民政策によって最先端の稲作と製鉄技術を導入することで地域政権が日本国家に発展していったのだろう。

伊勢斎宮と、国生み神話の淡路島を結ぶ北緯 34 度 32 分の直線の真ん中に位置する三輪山と二上山は、日がのぼり沈む陰陽二山だがその距離 17km は「倭国」と「葛城国」の権力バランスの距離であり、古代の農事や都市計画の物差しの 1 単位だったと仮定すれば、三輪山から東に 70km の伊勢斎宮と、二上山から西に 70km の淡路島「伊勢の森」は同じく 4 単位にバランス配置されていることになる。その先はもう伊勢湾と瀬戸内海である。

以上は大和國中（やまとくになか）から東西を俯瞰してきた。空見つ大和、天孫降臨の視点である。

次に水上、地上から逆方向に見ればどうなるか？ 遠い昔、遙かユーラシア大陸や朝鮮半島、九州から瀬戸内海を進んできた船は大阪湾で行き止まりになった。二双屏風のように立ち塞がる生駒山地と葛城・金剛山脈を前にして途方に暮れた人たちは、その切れ目にあいた小ぶりなフタコブ山を見て安堵したことだろう。「天の二上山」として霊山神話が語られるようになった所以かもしれない。彼らはあの隙間の奥に行ってみたいという誘惑に駆られたのではないだろうか。そして後年そこは近つ飛鳥、遠つ飛鳥、国のまほろば、乳と蜜の流れる地、ユーラシア大陸を横断するシルクロードの東の終点になった。

DVD作品

「太陽の道・北緯34度32分の謎―遺跡と遺跡を繋ぐ古代都市・まほろばの原像を求めて―」

(45分)

〈スタッフ〉企 画：中川 滋弘
演出・撮影：原 一男
撮影・編集：長岡 野亜
構 成：小林佐智子

小林佐智子さんに纏めて戴いたシノブシスを以下に記載する。

探検者・宮本楓(大阪芸術大学映像学科2回生)が太陽の道【北緯34度32分】を辿る。

宮本楓は石川県の能登半島(七尾市)から特撮を学びたくて進学してきた。郷土史研究家である祖父の影響を受け、古代史や民俗学に関心のある宮本は、大阪芸大が神界の「天の二上山」が地上に降臨した霊山・二上山の麓に位置していることに強い興味を惹かれる。

「太陽の道」と呼ばれる北緯34度32分の一直線上に古代遺跡と建造物が連なる謎と、その中心にあるのが揺るぎ無き自然の造形物、二上山だということが宮本の探究心を掻き立てた。

宮本はまず自分の足で「太陽の道」を辿り、古代の遺跡を訪ねることを思い立つ。本来は伊勢・斎宮跡が起点となるが、宮本は『大阪芸術大学をめぐる点と線』という発想で、三輪山から出発することにした。

I. 最初に訪ねたのは「三輪山」北緯34度32分。

- ①彼岸の日の出。
- ②大神(おおみわ)神社 北緯34度32分
神職・平岡昌彦さんの解説。―古代信仰、太陽と水(蛇)、稲作について。
- ③桜井市埋蔵文化財文化センター・丹羽恵二さんの解説。―纏向遺跡群発掘と明日香古代都市について。
- ④箸墓古墳 北緯34度32分
桜井市ボランティア協会・豊島志郎さんの解説。
―倭トトヒモソ姫の墓。あるいは卑弥呼の墓説。近年、卑弥呼の没年248年から遠くない構造年代であることが解明された。

II. 次に訪ねたのは「二上山」北緯34度31分。

- ①彼岸の日の入り。
- ②二上山登頂 二上山博物館・奥田昇さんが同行し解説してくれた。遺跡の故事来歴、パークスポットについて。
- ③大津皇子の墓 北緯34度31分

現在は天津皇子の墓ということとは否定されているという。

さらに『天上の虹(第27章 天津皇子)』作者・里中満智子キャラクター造形学科長に古代ロマンとしての二上山・天津皇子の墓についてのお話をうかがう。「二上山に太陽が沈む。そのただならぬ荘厳さ。いにしえからの人々の想いの集積が魂をかたちつくる」

『万葉集』にのこる天津皇子と姉・大伯皇女の歌の数々。薬師寺の『天津皇子像』

「三輪山」と「二上山」を探訪した宮本は『増補 倭の原像 知られざる古代太陽の道』(小川光三 著・大和書房)に書かれているように三輪山の曙光と二上山の落陽が、いにしえから太陽神への信仰となり毎朝の誕生と毎夕の死の円環の象徴となったことを実感として受けとめることが出来た。

Ⅲ. 二上山を降りて次に訪ねたのは「叡福寺」北緯34度31分。

- ①近藤住職から聖徳太子のお話を聞くことが出来たが撮影は固辞された。
- ②聖徳太子御廟・磯長陵—現在は宮内庁管理下に置かれ厳重に封印密封されている。地元にとって太子は父であり母である。太子信仰が根強い。地元ボランティア協会の皆さんがガイドしてくれた。
- ③叡福寺裏・五字ヶ峰石塔—太子伝説にある光が射してきた場所。
- ④西方院 蘇我住職の解説—「太子御廟を守った3人の尼」。

Ⅳ. 「大鳥神社」北緯34度32分。

今回の「太陽の道」最終地は、日本武尊の白鳥伝説で有名な大鳥神社である。

ところが神社から頑強に取材拒否され、日本武尊像も神社とは無関係だとまで言う。明治29年に政府の祭神考証の結果を受けて内務省の指示により日本武尊の祭神が否定され、関連の文物も全て持っていかれたので何も残っていないとのこと。ただし、参拝も外観の撮影も自由だった。

堺市教育委員会も観光課も日本武尊については科学的な根拠がないという回答だった。

Ⅴ. 最後に聖徳太子建立の「四天王寺」北緯34度39分。

西大門の石鳥居は極楽門と言われ、彼岸の日の入りには海に向かって善男善女が手を合わせる「日想観」修業が今も生きている。その太陽は伊勢斎宮から三輪山を通過して二上山を巡ってきた太陽であり、それが沈む海は難波津の茅渚の海。四天王寺の西大門は極楽浄土の東大門に当たる。遥かな昔、大陸からやってきた古代人は浄土から来たマレビトだったのかもしれない。

そして四天王寺の東大門には伊勢神宮遥拝石が鎮座している。太陽をめぐる農耕民族の陰と陽は「四天王寺」で収斂した。